

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：34406

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520043

研究課題名(和文)カント『オプス・ポストゥムム』の思想的境位

研究課題名(英文)A study on the philosophical position of Kant's Opus postumum

研究代表者

内田 浩明 (UCHIDA, Hiroaki)

大阪工業大学・工学部・准教授

研究者番号：90440932

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、カントの晩年の草稿である『オプス・ポストゥムム』の思想を、他の哲学者・思想家との関係に着目しながら究明した。本研究では、スピノザ主義やシェリング、シュルツェの『エーネジデムス』等の『オプス・ポストゥムム』の第7束や第1束で言及される思想との関係について考察したが、特にカントがどのような意図でスピノザ主義に言及したのか、そもそもスピノザやシェリングの思想を肯定的に捉えたのかどうかを解明できた。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies Kant's thoughts in Opus postumum, focusing on its relationship to the philosophers who were referred to in VIIth and 1st fascicles of Opus postumum. This study examines the relationship of Kant to Spinozism, Schelling and Schulze's Aenesidemus, and has made it clear why Kant referred to Spinozism, and whether or not he affirmed the philosophy of Spinoza and Schelling.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：カント 『オプス・ポストゥムム』 スピノザ主義 シェリング 『エーネジデムス』

1. 研究開始当初の背景

報告者が『オプス・ポストゥムム』の研究に取り組んだ背景としては、これまでに『オプス・ポストゥムム』研究を行ってきたこともあるが、そのことよりも国内外の研究動向が大きく関係している。

海外では特に1990年以降、『オプス・ポストゥムム』に関する研究が急速に進んでいる。1991年にはドイツで『オプス・ポストゥムム』に焦点を絞った論文集が公刊され、これに触発される形で、その後も多くの研究がなされている。

しかしながら、日本では『オプス・ポストゥムム』研究は必ずしも進んでいるとは言いがたい。とりわけ1800年以降に執筆された『オプス・ポストゥムム』の内容と他の哲学者・思想家との関係を究明する研究は国内では殆どなされていないというのが実情である。また、再び国外に目を転じて『オプス・ポストゥムム』で言及されている哲学者のうち、特にスピノザ(主義)とシェリングに関しては、カントが彼らをどのように評価したのかについては解釈は分かれ、現在でも論争が続いている。

そこで、本研究では、『オプス・ポストゥムム』の1800年以降に執筆された草稿群を中心に、スピノザ(主義)やシェリング等との思想的関係の解明を行うことにした。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、『オプス・ポストゥムム』のうち1800年以降に書かれた草稿群である第7束と第1束の思想と当該箇所と言及されている哲学者との関係やカントが彼らに言及する意図や意味を究明することにある。

考察対象としては、既に触れたスピノザ(主義)及びこれと同時に言及されるリヒテンベルクとシェリング、そして『オプス・ポストゥムム』でカントが言及するようになるシュルツェの『エーネジデムス』である。

(1) 上述の哲学者・思想家のうち、スピノザ(主義)とリヒテンベルクに関して言えば、『オプス・ポストゥムム』の第7束と第1束においてカントは彼らに繰り返し言及し、しかも驚くべきことに彼らの思想を「超越論的観念論」や「超越論哲学」と呼ぶようになる。そもそも批判期のカントは、スピノザ(主義)に対して一度も肯定的な評価をしておらず、物理学者であったリヒテンベルクに対しては「自然学者」として高く評価しているものの、哲学者として見ているわけではない。そこで、カントがどのような意図から『オプス・ポストゥムム』において彼らを「超越論的観念論」や「超越論哲学」との関連において語るのかを究明することが目的である。

(2) シェリングに関しては、スピノザ(主義)とリヒテンベルクとは対照的に、『オプス・ポストゥムム』全体でシェリングへの言及は、わずか二箇所に限られる。しかも、その叙述は、次のようにとりわけ曖昧である。「その中で我々が神を純粹直観において表象するスピノザの神。注意 空間は純粹直観の客体でもあるが、いかなる理念でもない。シェリング、スピノザ、リヒテンベルクによる超越論的観念論の体系、そして、言わば、三つの次元：現在、過去、未来」。このように曖昧な表現であることと言及回数が少ないため、カントがシェリングの著作を読んだのかどうかも含めそもそもシェリングの思想を肯定的に捉えたのかどうかを検討することが目的である。

(3) 『エーネジデムス』に関して言えば、カントは『オプス・ポストゥムム』において「超越論的観念論」や「自己定立論」との関連でしばしば言及している。しかも、その際、やはり叙述が曖昧であるがゆえに、文言だけを見れば、カントを批判しているはずの『エーネジデムス』を評価しているようにさえ映る箇所も見受けられる。それゆえ、『エーネジデムス』について究明することも研究目的の一つである。

3. 研究の方法

研究の方法としては、哲学研究という性格上、文献の読解が必ず中心となる。

カントの『オプス・ポストゥムム』の思想的境位を明らかにすることが研究目的であるが、『オプス・ポストゥムム』にはいわゆる批判期には見られない表現が散見される。第1束において神・世界・人間の関係性の考察を通じて理論哲学と実践哲学の統一を試みる「超越論哲学の最高の立場」もその一例である。それゆえ、批判期のカントの主要著作と『オプス・ポストゥムム』の読解を通じて、批判期との異同に留意しながら研究を進めた。

一方、カントが『オプス・ポストゥムム』で言及している哲学者・思想家との思想的関係を解明するという点では、彼らのテキストを読解し、『オプス・ポストゥムム』と比較検討する作業が中心になる。

本研究の主たる考察対象であるスピノザ(主義) シェリング、『エーネジデムス』のうち、スピノザ(主義)に関しては、後述するように、カントはきわめて高い確率でもってスピノザの著作そのものを読んでいなかったと言える。このため、カントに直接影響を与えたヴォルフ、バウムガルテン、ヤコービ、リヒテンベルク等の著作を参照した。また、シェリングに関しては、カントが『オプス・ポストゥムム』で言及している『超越論的観念論の体系』以外では『最近の哲学の文

献の概観』等の初期シェリングの著作を活用し研究を遂行した。『エーネジデムス』については、カントよりもラインホルトを主たる批判の対象にしているため、初期のラインホルトの諸著作（『哲学者たちの従来の誤解を是正するための寄稿集 第一巻』や『哲学知の基礎について』等）にも目を配りながら研究を進めた。

また、1798年以降、カントはいくつかの「声明」と弟子たちによって編集された講義録等を公表・出版するものの、それ以外に生前に公刊したものはない。このため、『オプス・ポストウムム』を執筆していた時期のカントの往復書簡やカントが目にした「書評」なども活用しながら研究を進めた。

4. 研究成果

研究成果としては、次項目にある活字3件（うち1件は解説を付した共訳によるスペイン語の翻訳）と学会発表2件がある。それらのタイトルやサブタイトルからも分かるように、スピノザ（主義）とシェリングに関する考察が本研究の主たる成果であり、なかでもスピノザ（主義）については継続的に研究を行った。それゆえ、スピノザ（主義）についてまず述べ、そのうえでシェリングに関する成果について、そして最後に『エーネジデムス』について述べる。

（1）既に述べたように、カントは『オプス・ポストウムム』の第7束と第1束で繰り返しスピノザ（主義）に言及し、スピノザ（主義）を「超越論的観念論」と言うようになるが、意外なことに主著である『純粹理性批判』においてすら一度もスピノザ（主義）に関する論及はない。

そこで、まずそもそもカントが実際にスピノザの著作を直接読んだのかどうか、また読んでいないとするならどこからスピノザ（主義）に関する知見を得たのかについて検討を行った。前者に関しては、1785年という汎神論論争のさなかにハーマンがヤコービに宛てた書簡に「カントはスピノザを一度もまともに研究しなかった、と打ち明けました」との言があり、実際にそれ以前のカントの公刊著作ではスピノザに関する言及がほぼ皆無（言及があるのは前批判期の『神の現存在の唯一可能な証明根拠』のみ）であることが分かった。こうしたことから報告者はハーマンの証言通り、カントはきわめて高い確率でもってスピノザの著作を読んではいなかったとの見解を示した。一方、後者の問題に関しては、カントがスピノザ（主義）に纏まった論及をし始めるのが1786年以降であり、その直接のきっかけを与えたのがヤコービであることから、カントのスピノザ（主義）理解がヴォルフやバウムガルテン、ヤコービなどの当時流布していたスピノザ（主義）の叙述に負うところが大きいことを明らかにし

た。

また、これに関連して批判期におけるカントのスピノザ（主義）批判が「無神論」や「汎神論」といった当時の考えに依拠しつつも、現象と物自体の区別に基づく「超越論的観念論」の立場から「自由」、「観念論や唯我論」、「狂信」を批判する文脈で語られるものであることを批判期のカントの著作・講義録・覚書等から文献的に証示した。

これに対して、スピノザ（主義）を「超越論的観念論」と呼ぶようになる『オプス・ポストウムム』においては、「神の内に一切を直観する」という言葉でもってスピノザ（主義）が表現され、しかもその際スピノザの『エチカ』の幾何学的方法に倣うかのように定義から公理、定理等々へと進める叙述スタイルを採っている箇所が第1束（の「神」に関する叙述）には散見される。第1束の主題は「神・世界・人間」の関係について「超越論哲学の最高の立場」から統一的に論じることであるからスピノザ（主義）をカント自身が評価していると考えられることもたしかに可能である。

しかしながら、カントの「超越論哲学の最高の立場」は、そもそも神ではなく、自発的な思惟する主体としての「人間」を媒概念とすることにより「神と世界」という異質な概念の統一を企図するものである。その意味においては神を唯一の実体と考えるスピノザ、ないしは「神の内に一切を直観する」というカントのスピノザ（主義）像とは言わば、対極にある。実際、カントがスピノザ（主義）を「おそるべき」という言葉や批判期と同様「狂信的」と形容しつつ批判している箇所が『オプス・ポストウムム』にも数多く見受けられる。また、さらに言うならば、カントは「人間精神はスピノザの神」であるとしたうえで「超越論的観念論は絶対的意味で実在論である」とも述べている。この「人間精神はスピノザの神」という着想は、リヒテンベルクからの影響によると考えられる。というのも、『オプス・ポストウムム』でリヒテンベルクに言及する際、カントは、リヒテンベルクの主張として、我々人間が世界を自らの内に創造しなければならないことを何度も強調しているからである。ただし、カントが実際に読み書き込みも残されているリヒテンベルクの著作『リヒテンベルクの雑篇集』（1801年公刊、現在は『控え帖』の名で出版されている）を繙くと、一切の外的対象の認識を否定し全てを単なる私の内に帰すという極端な観念論が展開されており、それによって外界の実在性を確保することはできない。その意味ではリヒテンベルクの観念論は、「超越論的観念論」を「絶対的意味で実在論」とするカントの考えとは相容れない。こうしたことから、報告者は、リヒテンベルクも含めスピノザ（主義）への言及がカント自身の立場、特に「超越論哲学の最高の立場」に基づく自らの「超越論的観念論」を鮮明に

するためのものである、との解釈を提示した。スピノザ(主義)が『オプス・ポストウムム』との関連においては殆ど研究されていない国内の研究状況下で、『オプス・ポストウムム』の多くの箇所から引証しつつ、カントがスピノザ(主義)を根本においては批判していることを明確にしたことが本研究の意義である。また、スピノザ特集として近時公開された『思想』において、僥倖にも幾人かの執筆者が報告者の研究に言及していることから、ある程度のインパクトを与えることもできたと考えている。

(2)スピノザ(主義)との関係の発展問題として、カントとシェリングとの関連について平成24年度を中心に研究を遂行した。『オプス・ポストウムム』にはスピノザ(主義)と同時にシェリングへの言及が見られる。ただし、既に触れたように、『オプス・ポストウムム』全体においてシェリングに関する言及は、わずかに二箇所に留まるうえ、その文言はさらに曖昧である。このため、カントがシェリングを肯定したのかどうか、あるいはそもそもいかなる意図でシェリングに言及しているのかについて、カント研究者たちの間で現在も論争が続いている。

このシェリングへの言及問題に関しては、カントが直接言及している『超越論的観念論の体系』とその「書評」に加えて、さらにシェリングの初期の著作(特に『最近の哲学の文献の概観』)と『オプス・ポストウムム』との思想を比較検討した。その際、報告者は「空間と時間」、「自己意識」、「自己定立」、「知的直観」等のフレーズとその語法に着目するという独自の手法で研究を行った。

そのことによって明らかになったのは、およそ次の二点である。まず第一に、『オプス・ポストウムム』研究で有名なトゥシュリングも指摘するように、カントがシェリングの著作を読んでいたら可能性は否定できないことである。というのも、シェリングの『最近の哲学の文献の概観』では「空間と時間」を「心性のはたらきの様式」とする叙述が見られるが、カントの『オプス・ポストウムム』においても「空間と時間」を「はたらき」や「自己活動性の産物」とする叙述が散見されるからである。あるいは、「自己定立」に関しても同様のことが言える。すなわち、カントの「自己定立」は、フィヒテのそれとは異なり、意識ないしは主体が「自己自身を客体にする」というものであるが、まさにこの「自己自身を客体にする」という表現が、シェリングの『超越論的観念論の体系』とその「書評」にも散見されるからである。ただし第二に、カントのシェリングに対する評価を巡っては、報告者はトゥシュリングと見解を異にする。トゥシュリングは、カントはシェリングを肯定し彼を超越論的観念論の代表者と見なした、とするが、報告者はこうした解釈を採らなかった。というのも、シェリングが(フ

ィヒテと同様に)「知的直観」を哲学の基礎に据えるのに対して、カントは『オプス・ポストウムム』において「超越論哲学」が「超越論的観念論の体系」であるとしたうえで、直観ではなく概念の重要性を強調しているからである。こうしたことから、カントはシェリング(場合によってはフィヒテも含め当時の主流となりつつあった思想)に抗し自身自身の立場を明確にするために、あえて「自己定立」などの表現を採っていることを明らかにした。

我が国ではスピノザ(主義)よりさらに未踏であるシェリングと『オプス・ポストウムム』との関係について研究し、明確な解釈を打ち出したことが最大の意義である。

また上記の内容に関連するフェリクス・ドゥケのスペイン語の論文「体系という湖の中の島:『オプス・ポストウムム』におけるカントとフィヒテ、シェリングとの関係」を共訳した。ドゥケはスペインを代表するカント研究者であり、『オプス・ポストウムム』のスペイン語訳の訳者でもある。当該論文は相当の分量があるため、ここではその内容を詳らかにすることはできないが(彼の主張と解釈の位置づけについては「訳者あとがき」を参照)、『オプス・ポストウムム』の研究が必ずしも進んでいない我が国で『オプス・ポストウムム』の重要なテーマを紹介したこととスペイン語によるカントの研究論文の翻訳を日本ではじめて行ったことが、当翻訳の意義である。

(3)『エーネジデムス』に関しては、その叙述の多くがカントよりもラインホルトに割かれているため当初予想した以上に時間を要し、学会発表や論文投稿の時期を逸し成果を公表するまでには至らなかった。無論、可能な限り早く成果として公表するつもりである。そこで、ここでは研究期間中に明らかになった事柄(のうちカントに関係し、しかも重要な点のみ)を展望も含めて記すことにする。

まず先行研究について言えば、ドイツ観念論ほどではないにせよ、カントとシュルツェの関係についてこれまで海外の多くの研究者が論じ、最近でも論究されている。しかし、その場合、批判期に焦点を合わせた研究が大半であり、『オプス・ポストウムム』まで射程に入れた研究は殆どない。一方、『オプス・ポストウムム』研究では『エーネジデムス』に触れられることがあるが、アディッケスを除けば、本文や注で僅かに言及されているものが大半であった。

次に『エーネジデムス』のカント批判について言えば、周知の通り、『エーネジデムス』はシュルツェが匿名で懐疑論の立場からカントの「批判哲学」とラインホルトの「根元哲学」を批判する目的で公刊した書物であるが、カント批判は「ヒュームの懐疑論は本当に理性批判によって論駁されたのか」とい

う箇所で集中的に行われる。当該箇所のシユルツェの叙述は、冗漫で議論もかなり込み入ったものとなっているが、カント批判のキーワードとなるのは、「ア・プリオリな総合判断の思惟する主体からの導出」(『エーネジデムス』では「必然的な総合判断の心性からの導出」と表現されている)、「(心性への現実性や原因と結果の)カテゴリーの適用」、及び「思惟から存在への推論」の三つである。その要点のみを記せば、およそ次のようになる。

カントはア・プリオリな総合判断が実際に存在することを思惟する主体から保証しようとしているが、このことは、思惟する主体へとカテゴリーが適用できない以上、不可能なはずである。にもかかわらず、カントが思惟する主体からア・プリオリな総合判断の導出を行おうとすれば、心性に因果性や現実性のカテゴリーの適用をしていることになる。しかもア・プリオリな総合判断の根拠と源泉を思惟する主体の側に求めるとすれば、我々がこの判断の根拠として「考え〔思惟し〕うる」のが心性しかないという理由によって心性が同時に「現実的に」もその根拠でなければならないと推論していることになり、「思惟から存在への推論」という批判哲学が禁じたことをカント自身が行っていることになる。しかもこのことは、我々の内にある表象や思考の性質から表象の外にある物の客観的で実在的な性質を導出していることにもなる。だが、このことこそヒュームが我々の表象(観念)と我々の思考の外にある対象の両者がどの程度対応・関係しているのか、という仕方での妥当性を疑った当のものに他ならぬ。したがってカントはヒュームが懐疑の目を向けたことを常に前提としており、ヒュームの論駁に成功していない。

一方、カントの『エーネジデムス』への言及について言えば、『エーネジデムス』では上のようにカントはヒュームとの関連において批判されているわけであるが、意外なことにカントの言及箇所にはヒュームという言葉は見当たらず、むしろ『エーネジデムス』は「観念論」の文脈で論及されることが多い。例えば、『エーネジデムス』が公刊された1792年のある書簡でカントは、「エーベルハルトとガルヴェ」のようにカントの観念論を「バークリの観念論」と同一視する考えは「全く顧慮するに値しない」と述べたうえで、『エーネジデムス』が「我々の表象が他のもの(客観)に対応しているのかどうか知ることができない」という「一歩進んだ懐疑論」を開陳しているとしつつも、「表象」とはそもそも客観を我々の中で代わりに表す我々の内なる規定であるがゆえに意味のないことを言っていると批判している。また『オプス・ポストゥムム』でも「観念論」との関連において言及される。例えば、「エーネジデムスとテアイトス(観念論者ないしは唯我論者)」や「空間と時間は、物自体

(entia per se)ではなく、感官の表象の単なる形式である。ア・プリオリな純粹直観としてのすべての表象の観念性の原理〔。〕私は私自身を私の外なる感官の対象にする(エーネジデムス)」といった叙述がある。これらのカントの文言は、明らかに本項の直前にあった『エーネジデムス』のカント批判に対する反論と考えられる。

しかしながら、『エーネジデムス』はカントに単に否定的な影響を与えたわけではない。カントが『エーネジデムス』を批判するとしても、そこからよりソフィストケイトされた思想もあると考えられる。「自己定立」がその好例である。そもそもカントの自己定立論は、フィヒテと違って主体が自己自身を客体化・対象化する自己構成の理論であるが、とりわけ空間と時間において自己を感性化する点にその特徴がある。それゆえ、実際に『オプス・ポストゥムム』には『エーネジデムス』と「空間と時間」における「自己定立」とを関連させた叙述が散見される。このため、本項で触れた数少ない先行研究のアディッケス、さらに比較的最近ではイタリアのマティウも自己定立論との関連において『エーネジデムス』のカントへの寄与の可能性を示唆している。ただし、両者ともこの点に関する叙述の量が少ないため、具体的にどのような形でカントに影響を与えたのかについては立証していない。そこで、今後は、本項目で述べた事柄を基に考察を深め、可能な限り早急に成果として公開したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

フェリクス・ドゥケ著(内田 浩明、中野 裕考 共訳)「体系という湖の中の島:『オプス・ポストゥムム』におけるカントとフィヒテ、シェリングとの関係」、査読有、大阪工業大学紀要(人文社会篇)第58巻第1号、2013、pp. 29-56

内田 浩明、「『オプス・ポストゥムム』におけるスピノザ主義再考 - カントのシェリングへの言及問題」、査読有、人間存在論、第19号、2013、pp. 1-15

〔学会発表〕(計 2 件)

内田 浩明、「カントとスピノザ主義『オプス・ポストゥムム』を中心に」、第62回スピノザ研究会、2013年9月28日、於 大阪大学(大阪府豊中市)

内田 浩明、「『オプス・ポストゥムム』におけるスピノザ主義再考 - シェリングへの言及問題も視野に入れ」、カント研究会 第266回例会、2012年12月23日、於 法政大学(東京都千代田区)

〔図書〕(計 1 件)

松本 啓二郎、戸田 剛文、内田 浩明
他、京都大学学術出版会、『哲学するの
になぜ哲学史を学ぶのか』(第7章「超
越論哲学の歴史的背景 - カントとスピ
ノザ主義」)、2012年、296(245-287)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内田 浩明 (UCHIDA, Hiroaki)
大阪工業大学・工学部・准教授
研究者番号：90440932